

第3 問題作成部会の見解

「生物基礎」

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 日常生活や社会との関連を考慮し、科学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解と、それらを活用して科学的に探究を進める過程についての理解などを重視する。問題の作成に当たっては、身近な課題等について科学的に探究する問題や、得られたデータを整理する過程などにおいて数学的な手法を用いる問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

(1) 全体概況

「生物基礎」の受験者数は114,187人であり、昨年度の本試験と比較すると、201人減少したものの、理科の基礎科目の中では最も多い受験者数となった。平均点は、36.46点(100点換算で72.92点)であり、昨年度よりも5.07点上昇し、理科の基礎科目の中で最も高い結果となった。

(2) 各大問に関する出題意図と解答結果

第1問

Aは、「生物の特徴」の分野から「生物の共通性」及び「光合成と呼吸」に関する出題で、生物の細胞に共通する性質についての基本的な知識を問うとともに、光合成と呼吸の概要の理解をもとに、図から得られる情報を基に考察する思考力と判断力を問うた。学力層における識別力は全体的にはおおむね良好であった。正答率は、問1は37.10%と低め、問2(1)は64.30%と平均的、問2(2)は78.99%とやや高めであり、中間全体としてはおおむね良好であった。

Bは、「遺伝子とその働き」の分野からの出題で、DNA複製に関する基本的な概念の理解を問うとともに、複製により合成されるDNA量について考察する思考力を問うた。識別力はおおむね良好であった。正答率は、問3は73.63%とやや高め、問4は42.24%とやや低めであったが、中間全体としてはおおむね良好であった。

第2問

Aは、「体内環境の維持」の分野からの出題で、ホルモンや自律神経による体内環境の調節、体液の塩分濃度調節、および気温変化や運動に伴う体温調節に関する基本的な概念の理解を問うとともに、文章や複数の情報を基に課題を発見し、科学的に考察して結論を導く思考力と判断力を問うた。識別力はおおむね良好であった。正答率は、問1は77.45%、問2は66.83%でやや高く、問3は84.42%と高く、中間全体としてやや高かった。

Bは、「免疫」の分野からの出題で、自然免疫及び獲得免疫に関する基本的な知識を問うとともに、新型コロナウイルス感染症の予防接種回数と患者数の関係を示したグラフを基に、情報を読み取り分析する力とワクチンに関する基礎的な理解を問うた。識別力はおおむね良好であったが、問6は中位から最上位の識別力が低かった。正答率は、問4は76.37%、問5は71.67%でやや高く、問6は89.90%と高く、中間全体としてやや高かった。

第3問

Aは、「植生と遷移」の分野からの出題で、一次遷移や森林限界、日本の垂直分布に関する基本的な概念の理解を問うとともに、分布の異なる草本の生態に関する理解を基に、図や表から得られる情報を科学的に考察する思考力を問うた。識別力はおおむね良好であったが、問2は中位から最上

位の識別力がやや低かった。正答率は、問1は82.95%、問2は87.11%で高く、問3は78.45%とやや高く、中間全体として高かった。

Bは、「生態系と生物の多様性」の分野からの出題で、生態系のバランスや保全に関する基本的な概念の理解を問うとともに、外来生物と在来生物の捕食関係に関する実験結果を基に、情報を分析・評価して判断する力を問うた。識別力はおおむね良好であった。正答率は、問4は87.85%と高く、問5は67.29%とやや高めであり、中間全体としてはやや高かった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

(1) 全体に対する反響・意見等についての見解

出題範囲、難易度、解答時間に対する分量ともにおおむね適切な問題作成であったという評価であった。基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題に加え、日常生活や社会に関連した題材や実験データ・図表を基に科学的に考察する問題が配置されており、知識・技能と思考力・判断力を総合的に問う構成となっていた点が評価された。一方で、今年度は知識を問う設問の割合がやや多かったとの意見もあり、今後も学習指導要領に沿った出題バランスの維持に努めたい。形式面では、選択肢数の削減や「過不足なく」選ぶ形式の出題がなかったことにより、受験者が思考に集中しやすい構成となった点が評価された。また、図表や資料を用いてデータを読み取り論理的に判断する設問や、日常生活と生物学の関連を問う設問については、今後も継続的な出題が望まれるとの意見があった。今後の作問においては、問題文や図表の表現の明確さや視認性への配慮、生命倫理への配慮を要する題材の扱いなどにも留意するとともに、基礎科目間の平均点の差が過度に生じないように、難易度の調整にも引き続き配慮していきたい。

(2) 各大問に対する反響・意見等についての見解

第1問

Aは、全体として、知識を問う問題、知識の活用を問う問題、考察する力を問う問題がバランスよく配置されており、難易度もおおむね適切であったとの評価を受けた。問1は、「生物の共通性」に関する基礎的理解を問う問題であり、生物が共通して遺伝情報をもつことを前提に、DNAではなくRNAに着目させることで、単なる知識の再生にとどまらず、複数の知識を関連付けて考える力を測ることのできる良問であると評価された。正答率はやや低めであったものの、理解が曖昧な受験者と、基本事項を正確に理解している受験者を区別する設問として機能していたとの見方が示された。問2は、植物の光合成や呼吸に関する内容を扱い、基本的な知識を前提としながら、与えられた実験データや図から情報を読み取り、その意味を判断する力を問う問題として高く評価された。また、植物と菌類との関係性を含む設定についても、受験者にとって興味深く、学習内容を実際の生物現象と結び付けて考えさせることができる点が良いとの意見があった。

Bは、遺伝子とその働きに関する問題であり、DNAの構造やゲノムについての基礎知識を問う問題に加え、半保存的複製の理解を活用して数量的に考えさせる問題が含まれており、知識・活用・考察のバランスが取れていると評価された。特に、DNAの本数を文字で置き換えて考えさせる問4は、単なる暗記ではなく、複製の仕組みを本質的に理解しているかを測ることができる問題として評価された。一方で、一部の選択肢表現については、教科書の記載や受験者の解釈によって複数の読み方が生じる可能性があるとの指摘もあった。例えば、転写やmRNAに関する記述については、生物で扱う内容との接続を意識した受験者ほど、作問者の意図とは異なる観点から判断した可能性も考えられる。今後も、複数の知識を関連付けて考えさせる良質な問題を維持しつつ、教科書間の差異や解釈のぶれをできるだけ生じさせないように、選択肢や文章表現の明確さにより一層配慮したい。また、第1問は共通テストの冒頭に配置されることから、受験者の心理的負担にも一定の影響

を与える可能性があり、導入としての取り組みやすさと識別力との両立にも引き続き配慮したい。

第2問

Aは、体内環境の維持と免疫を扱った大問であり、知識問題と考察問題が適切に組み合わせられ、全体として標準的かつバランスの取れた難易度であったとの評価を受けた。問1では、自律神経系や内分泌系による調節についての基礎的知識を問う構成となっており、恒常性に関する基本的な理解を確認する設問としておおむね適切とされた。一方で、一部にはやや細かな知識を問う側面があることや、表現をより正確にした方が望ましい箇所があるとの指摘もあった。問2は、体液の塩類濃度調節やバソプレシンの作用に関する理解を問う問題であり、関連知識をもとに考えれば解答可能である一方、教科書によって記載の程度に差がある内容を含むため、使用教科書による有利・不利が生じる可能性に留意すべきとの意見があった。問3は、深部体温の変化を示した資料をもとに、体温調節の仕組みを考察させる問題であり、体温調節や自律神経に関する知識を活用してグラフを読み取り、科学的に判断する力を測る良問であると評価された。加えて、地球温暖化や酷暑といった今日的な社会状況とも関連付けやすく、受験者の関心を引きやすい題材設定であったことも評価された。その一方で、人体を用いた実験設定を扱う以上、安全面や倫理面への配慮が問題文からより明確に読み取れる形にすることが望ましいとの指摘もあった。

Bの免疫分野については、問4の自然免疫は基礎事項の定着度を測る知識問題として適切であり、難易度もおおむね妥当とされた。問5は、獲得免疫に関わる細胞やその働きについて問う問題であり、基本的理解を測る点では適切と評価された一方、細胞性免疫と体液性免疫の区別や、B細胞の抗原提示など、教科書によって扱いに差がある事項に踏み込んでいるとの意見も見られた。問6は、新型コロナウイルス感染症とワクチン接種という、受験者にとって身近で現代的な題材を扱った点が高く評価され、日常生活や社会の事象と生物学を結び付けて考えさせる問題として望ましいとの意見が多かった。一方で、グラフの単純な読み取りのみで正答に到達できる面もあり、免疫に関する学習成果の活用という観点からは、より一歩踏み込んだ設問構成の工夫が期待されるとの指摘もあった。

今後は、身近で現実的な題材を積極的に取り入れつつ、学習内容との結び付きがより明確になり、知識の活用や考察の深まりが一層適切に測れるよう、題材設定、選択肢構成、文章表現の各面で工夫を重ねていきたい。

第3問

Aは、植生と遷移、及び生態系のバランスと保全を扱う大問であり、知識を問う問題と、複数の資料や実験結果をもとに考察させる問題とが適切に配置されていたとの評価を受けた。また、富士山を題材とした遷移やバイオームに関する問題が出題され、身近な自然環境を取り上げることで、受験者の興味・関心を引きつける題材設定になっていたと評価された。問1は、一次遷移に関する基礎知識の定着を確認する設問として適切であり、問3も垂直分布や森林限界に関する基礎的理解を問う問題として妥当とされた。問2は、複数の植物に関する調査結果や実験結果を整理し、図表から適切な情報を読み取って判断する問題であり、知識と資料読解を結び付けた良問であるとの評価が多く示された。情報量はやや多いものの、選択肢数が抑えられており、受験者が思考に集中しやすい構成になっていた点も評価された。

Bでは、生態系のバランスや外来生物の影響に関する問題が出題され、問4は種多様性や絶滅が生態系に及ぼす影響についての基礎的・概念的理解を問う問題として適切とされた。問5は、ツチガエルと外来生物をめぐる実験結果をもとに、複数の条件や資料を整理しながら判断させる問題であり、現実的なテーマを扱いつつ、生物間の関係や生態系の多様性を多角的に考察させる良問として高く評価された。他方で、この種の問題は資料や条件の整理に一定の時間を要するため、約30分

という試験時間全体の中で、設問数や他の問題とのバランスを考慮する必要があるとの指摘もあった。また、一部の図表表現については、視認性や図の意味づけが受験者に十分明確に伝わるよう、説明の付し方に更に工夫の余地があるとの意見があった。加えて、外来生物の駆除や生物を死に至らしめる実験設定を扱う問題については、生態系の学習上意義がある一方で、生命の尊厳や受験者の心理的負担に対する慎重な配慮が望まれるとの意見も示された。

今後は、科学的に探究する力を測る良問を引き続き重視しつつ、全体の分量や難易度、図表の分かりやすさ、題材設定の適切さに配慮し、受験者が限られた時間の中で学習成果を十分に発揮できるような問題作成を目指したい。

4 まとめ

「生物基礎」の作題に当たっては、暗記重視の学習から思考力重視の学習への転換を促すという共通テストの狙いを踏まえ、生物の基礎的分野における知識・技能の習得の程度、知識を応用して思考する能力、数理的・計算的に考える能力、さらに高校現場での探究活動を意識した実験データや図表の読み取り、考察や実験計画の立案など、多様な能力を総合的に問う問題を作成した。問題はできるだけ日常生活や社会と関連する題材をもとに構成し、実験資料やグラフを基に科学的に判断させる設問を配置することで、知識・技能と思考力・判断力の双方を測る構成となるよう工夫し、選択肢数の削減などにより受験者が思考に集中しやすい問題構成とすることにも配慮している。また、文系の受験者が多数いることを鑑み、それらの受験者にも科学的な考え方を高等学校で身につけてほしいというメッセージを込めた問題作成を心掛けている。生物基礎は、生物を構成する細胞の基本的な振る舞い、その細胞が集まって形成されるヒトの体の調節機構、さらに生物と環境との関係など、多様な視点から生命現象を理解するための重要な科目である。これらの特徴を生かしつつ、基本概念や原理の理解を確認する設問と、資料やデータを基に論理的に考察させる設問とをバランス良く配置し、受験者の学習成果を適切に測定できるよう配慮した。一方で、今年度は知識を問う設問の割合がやや多いとの指摘もあったことから、今後も学習指導要領の趣旨に沿った出題バランスの維持に努めたい。さらに、問題文や図表の表現の明確さや視認性、題材設定における生命倫理への配慮などにも留意するとともに、試験時間に対する分量や難易度にも注意を払い、基礎科目間の平均点差にも配慮しながら、適切かつ良質な問題の作成に引き続き努めていきたい。

『生物』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する。問題の作成に当たっては、受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題や、観察・実験・調査の結果などを数学的な手法を活用して分析し解釈する力を問う問題などとともに、科学的な事物・現象に係る基本的な概念や原理・法則などの理解を問う問題を含めて検討する。

なお、センター試験で出題されてきた理科の選択問題については、設定しないこととする。

2 各問題の出題意図と解答結果

(1) 全体概況

「生物」の受験者数は、56,314人であり、共通テスト5年目であった昨年度の本試験と比較すると、1,671人減少した。平均点は、55.01点であり、昨年度よりも2.80点上昇した。理科の中で化学に次いで2番目の高さであった。

(2) 各大問に関する出題意図と解答結果

第1問

「生物の進化」の分野からの出題を主とし、人類の系統や進化のしくみに関する理解と思考力を問う問題とした。また、「遺伝子を扱う技術」の分野から塩基配列の解読に関する知識とそれを基にした思考力を問うた。大問全体の得点率は48.61%とやや低かったが、学力層における識別力は良好であった。問1は、人類の進化についての知識問題であり、正答率は42.12%とやや低かったが、全ての層を識別できていた。問2(1)は、集団の大きさと対立遺伝子頻度との関係を問う問題で、正答率は73.22%と高かったものの、識別力はおおむね良好であった。問2(2)は、ハーディ・ワインベルグの法則を用いて遺伝子頻度を計算する問題で、正答率は49.91%とやや低かったが、識別力は高かった。問3は、遺伝子型と電気泳動のバンドパターンとの関係について思考力を問う問題であり、正答率は45.95%とやや低かったが、識別力は高かった。問4は、データを基に組換え頻度について考察する問題であり、正答率は31.86%と低かったものの、最上位層を識別することができた。

第2問

アクチンフィラメントや微小管などの細胞骨格の構造と機能を題材に、「生命現象と物質」、「遺伝情報の発現と発生」、「生物の環境応答」に関する複合的な理解と思考力を問う問題であり、大問全体の得点率は59.85%で、識別力は良好であった。問1は、アクチンフィラメントやサルコメアの構造についての基礎知識を問う問題であり、正答率は60.90%で、下位層から上位層までよく識別できていた。問2では、神経軸索上で働くモータータンパク質について、実験結果から二つのタンパク質の性質を判断する問題で、正解を二つ選ぶ形式であった。正答率はそれぞれ84.93%と74.13%と高かったが、両方正答した割合は65.99%であり、下位層から上位層までよく識別できていた。問3は、精子の鞭毛の運動に関するモデル実験の結果を基に、運動装置の内部構造の役割について考察する問題であり、正答率は(1)が46.21%、(2)が49.11%とやや低かったが、いずれも識別力は良好であった。

第3問

「生物の進化」及び「遺伝情報の発現と発生」の分野から、ショウジョウバエの前後軸形成における転写制御と翻訳抑制を題材に、「遺伝子の変化と進化のしくみ」及び「発生と遺伝子発現」に関する理解と思考力を問う問題とした。大問全体の得点率は37.99%とやや低かったが、識別力は受験者全体を通して高かった。問1は、母性因子の遺伝に関する計算問題であり、正答率は15.20%と低かったが、上位層を識別できていた。問2は、翻訳抑制による遺伝子発現制御の理解を基に考察する問題であり、(1)は得られた情報から結論を導く力を、(2)は実験結果を基に判断する力を、(3)は新たな仮説を考察する力を問うた。(1)と(3)の正答率はそれぞれ38.82%、34.21%とやや低く、いずれも識別力は良好であった。(2)の正答率は25.17%と低く、上位層のみを識別する結果となった。問3は、転写制御による遺伝子発現の理解を基に、得られた情報を科学的に考察して推論する問題であり、正答率は77.68%とやや高く、特に下位層から中位層の識別力が良好であった。

第4問

「生物の環境応答」の分野からの出題であり、動物や植物における刺激の受容と反応のしくみに関する理解と、実験結果や観察資料を基に考察する思考力・判断力を問う問題とした。大問全体の得点率は57.18%で適切であり、識別力も良好であった。問1は、動物や植物が刺激を感知して応答するしくみに関する基礎知識を問う問題であり、正答率は51.37%と適切で、識別力も良好であった。問2は、シロイヌナズナの芽生えに対するエチレン処理による胚軸伸長の制御を題材とし、実験結果と植物ホルモンの基礎知識を基に考察する思考力・判断力を問う問題であった。(1)の正答率は48.83%とやや低かったが識別力は良好であり、(2)の正答率は68.28%とやや高かったものの識別力はおおむね良好であった。問3(1)は、ガのコウモリからの逃避行動を題材として、行動と神経系のはたらきとの関連について理解を基に複数の情報を整理・統合して考察する問題であり、正答率は79.13%とやや高く、識別力はおおむね良好であった。問3(2)は、ガの聴覚器官に関する理解を基に刺激の受容と反応の関係を考察する問題であり、正答率は40.92%と低かったが識別力は良好であった。

第5問

「生命現象と物質」及び「生態と環境」の二つの分野を融合した出題であり、「呼吸」や「生態系の物質生産と物質循環」に関する資料を基に、基礎的知識とそれを活用した思考力・判断力を問う問題とした。大問全体の得点率は71.39%でやや高かったが、識別力はおおむね良好であった。問1は、生態系と人間生活の関係についての知識問題であり、正答率は76.24%とやや高く、識別力はおおむね良好であった。問2は、生態系における物質生産と物質循環の理解を基に考察する問題で、正答率は89.91%と高かったが、中下位層から最下位層は識別できていた。問3は、植物の呼吸に関する理解とマングローブ植物の根の呼吸に関する図から得られる情報を基に考察する問題であり、正答率は48.71%とやや低く、識別力は良好であった。問4(1)は、植物の窒素同化のしくみとマングローブ植物の根における窒素同化のデータを基に考察する問題で、正答率は70.28%とやや高く、識別力はおおむね良好であった。問4(2)は、窒素固定のしくみに関する理解を基に、マングローブ植物の根における窒素固定に関する図から得られる情報を考察する問題であり、正答率は71.78%とやや高く、識別力はおおむね良好であった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

(1) 全体に対する反響・意見等についての見解

基本的概念や原理・法則の理解を問う問題に加え、観察・実験・調査の結果を分析・解釈する力

を問う問題が配置され、未知の資料を扱う問題で学習した知識や思考力を活用して解答するなど、多様な視点から生命現象を捉える出題内容が評価された。一方、探究の過程を重視した実験計画に関する問題が見られなかったことや旧課程教科書の内容は題材とすべきでないとの指摘もあった。出題範囲は、分野融合的な問題も含めてバランスの良い構成であり、分量についても小問数の減少やレイアウト、選択肢数の削減により受験者の負担軽減につながったとの評価があったが、文章量がやや多いとの指摘もあった。難易度は平均点が 55.01 点と昨年度より上昇し、おおむね適切な水準であった。一方で、大問間の難易度の差や理科学科目間の平均点の差については、引き続き調整を求める意見もあった。また、「過不足なく」選ぶ形式の問題は解答に時間を要するため、出題には慎重な配慮を求める意見があった。今後も知識問題と思考問題をバランス良く配置し、学習成果が適切に評価される試験となるよう作問を工夫していきたい。

(2) 各大問に対する反響・意見等についての見解

第 1 問

人類の進化を題材に、「進化のしくみ」と「遺伝子を扱う技術」を関連付けた分野横断的な問題として出題された。ネアンデルタール人由来の遺伝子と痛覚感受性の個人差を結び付けた題材設定は、近年の研究成果を踏まえた興味深い内容であり、受験者の知的関心を喚起する良い試みであるとの評価を得た。問 2 では遺伝的浮動やハーディ・ワインベルグの法則を用いた計算問題が出題され、計算問題を取り入れることで学力を多角的に測ることができる点が評価された。一方で、組換え頻度を扱う問 4 については、情報量が多く解答に時間を要する点や、表現や図表の提示方法に改善の余地があるとの指摘もあった。今後は、資料の提示方法や文章表現に配慮しつつ、複数の知識を関連付けて思考させる問題を引き続き出題していきたい。

第 2 問

細胞骨格やモータータンパク質を題材とし、細胞と分子の分野に関する知識と実験結果の考察力を問う問題として出題された。問 2 は複数の実験条件と結果を比較してモータータンパク質の性質を導き出す内容であり、探究の過程を意識した良問であるとの評価を得た。図や実験結果が明瞭で、論理的思考によって解答できる構成であった点も評価された。一方で、旧課程で扱われていた内容が題材として含まれていたことや、一部の設問ではやや細かな知識を前提としている点について指摘があった。今後は現行課程の学習内容との整合性にも留意しながら、実験結果の分析を通して思考力を問う出題を継続していきたい。

第 3 問

ショウジョウバエの発生を題材に、母性因子や前後軸形成に関する遺伝子発現の調節を扱った問題であり、実験データを基に論理的に考察する力を問う構成となっていた。問 2 では翻訳抑制による遺伝子発現調節のしくみを多角的に考察させる問題であり、分子的な調節機構の理解を踏まえた思考力を測る良問であるとの評価があった。一方で、本大問は知識問題が含まれず思考問題に偏っていたことや、全体として難易度が高く解答に時間を要する構成であったとの指摘もあった。また、問 1 では設問文の訂正が行われたことにより一部の受験者に混乱が生じた可能性があるとの意見もあった。今後は知識問題と考察問題のバランスにも配慮しながら作問を進めたい。

第 4 問

生物の環境応答をテーマに、植物と動物の刺激の受容と反応を扱った問題であり、知識問題と思考問題がバランス良く配置されていたとの評価を得た。シロイヌナズナの植物ホルモン作用やガの回避行動など、異なる生物群を題材とした出題は分野横断的な理解を問うものとして評価された。問 2 や問 3 では実験結果や資料を基に論理的に判断させる問題となっており、思考力を適切に測る設問であるとの意見が多かった。一方で、一部の教科書で扱われていない内容や旧課程

に関連する題材が含まれている点については指摘があり、今後の作問では教材間の差異にも配慮する必要があるとの意見があった。

第5問

ヤエヤマヒルギを題材として、マングローブ生態系における呼吸や窒素獲得のしくみを扱った問題であり、生物と環境との関係を多角的に考察させる構成となっていた。近年注目されるブルーカーボンの概念と関連付けた題材設定は、現代的な社会課題と生物学を結びつける試みとして評価された。データや実験結果を基に考察させる設問が多く、思考力を測る良問であるとの意見があった。一方で、「過不足なく」選ぶ形式の設問や選択肢の文章量が多い問題については、受験者の負担を高める可能性があるとの指摘もあった。今後は資料の提示方法や設問形式を工夫し、受験者が思考に集中できる出題となるよう配慮していきたい。

4 まとめ

「生物」の作題に当たっては、共通テストの方針に基づき、知識の習得だけでなく、知識を基に資料を読み取り、論理的に思考・判断する力を評価する問題を重視している。今年度の試験では、知識問題と考察問題のバランスがおおむね適切に保たれており、図表やグラフを活用した出題や選択肢数の抑制などにより、受験者が思考する時間を確保する工夫も見られた。これまで指摘されてきた文章量の削減や表現の平易化、図表の活用といった点についても一定の改善が見られ、学習成果を多角的に測る出題として評価できる。一方で、「過不足なく」選ぶ形式の問題や、旧課程で扱われていた内容を題材とする問題については、受験者への負担や教科書間の差異に配慮する必要があるとの指摘があった。また、問題によっては文章量や情報量が多く、受験者が後半の設問に十分な時間をかけられなかった可能性も指摘されている。今後は、思考力を問う問題を重視する基本方針を維持しつつ、知識問題とのバランス、問題量や難易度、図表や資料の提示方法などに一層配慮し、受験者が十分に思考できる構成となるよう作問を進めていきたい。また、理科各科目間で平均点に大きな差が生じないよう難易度の調整にも留意し、公平性を確保した試験となるよう努めたい。